

Biết kich 別激

知られざる南ベトナム軍コマンド部隊の実像(2)

Cover Photo

Les Heri

© WORLD PHOTO PRESS 2023

※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

012 ベトナムを遠く離れて——。
私的ベトナム戦争映画／TVムービー Part 15 文／小倉 徹

014 ベトナム人民軍小史
—“必勝”の思いを胸に強敵を打ち破った東南アジアの赤い星—

020 第51回 サイゴン物語 Saigon Memories
記者たちのベトナム戦争【28】

まだ語られていない

024 LST船員の記録 第13回
UNTOLD SEAMAN BLUES

戦場のアーティスト Part 2

034 戦う男たちの肖像

046 JAPANESE ORIGIN
TAILOR TOYO WORKS
～日本発祥の洋服、スカジャン～

057 The Equipments of the U.S. Force
[現用米軍装備カタログ]

「海」装備特集 part 9 解説／松原 隆 撮影／山崎 学
1990年代の強襲上陸装備特集
ロンドン・ブリッジ・トレーディングLBT-1195J&K編

066 Militaria Roundup!
U.S. ARMY シャツ & トラウザーズ Part 2

072 ウェスタンアームズ新製品レポート
by SHOTGUN MARCY

●コルトM1991A1ヒート・カスタム マットブラックVer.
●コルト・コブラ・カスタム リアルスチールVer.

080 トイガンニュース TANAKA WORKS
●S&W .38チーフ・スペシャル(プレM36)2インチ・
スクエア・バット ジョーカー・モデル／HW Ver.2
●S&W M360PD .357マグナムHW
シリンダー・セラコート
●共栄通商、タナカ・ワークス別注限定モデル
S&W M68 C.H.P. ファースト・デリバリー 6インチ

連載特集②



081 東京マルイ新製品レポート
●電動ガン「+シリーズ」第1弾 P-90+
by Takeo Ishii

086 サバゲ三等兵APS部
節目の第30期APSカップを振り返る豪華二本立て!
APS マスターズカップ 2022 リポート & 特定非営利活動法人
日本エアースポーツガン協会 鈴木宏一事務局長インタビュー

089 THE グリーンベレー 文／DJちゅう
GREEN BERET
スペシャルフォースチームスペシャリティズ 前編

094 ニッポンのちからこぶ ●写真と文／菊池雅之
機動旅団化改編間近 第5旅団
JGSDF 5th Brigade

098 ANOTHER SIGHT PICTURE
Turkey heliport photo session

COMBAT FRONT LINE

104 G&G LOVERS THE FINAL 2022
107 今月の中田焦点!
セスラー M-51 PARKA M-1951 フィールドパーカ
108 新作映画情報新作映画情報「MEN 同じ顔の男たち」
「ザ・メニュー」「ワイルド・ロード」
102 第25回 Stringer Blues 写真・文／横田 徹
106 レアミリタリーテクノロジー
109 遊戯銃生誕60周年記念 ASGK特別プレゼント
111 奥付&次号予告



ミリタリースポッター

This is a conceptual visualization of CRENIC project:
life-saving protection for UK military.
It is the system of invisible shield against IEDs.

The project entitled CRENIC will develop equipment designed
to be carried by soldiers, fitted to vehicles and protect military bases
by detecting and disrupting explosive devices using advanced
techniques across the electromagnetic spectrum.

Photo/UK defense ministry

これは、イギリス軍が開発中のプログラム、クレニックを視角化した図である。このプログラムでは、即席爆弾の被害から、イギリス軍の兵士や車両、基地を守ることを目的にしている。いわゆる手製爆弾IEDが、起爆装置として使っている無線を遮断するのは簡単ではない。また、一つひとつが手作りのため規格がなく、一気に無力化できる方策がない。それらの対策を含めて、先進の電子機器技術を応用することでプロテクションシステムを構築することが狙いである。

Biết Kịch

第2回

別激 知られざる南ベトナム軍 コマンド部隊の実像(2)

SPECIAL INTERVIEW WITH
FORMER SOUTH VIETNAMESE
COMMANDO Lt. HOA PHAM
(PART 2)

ベトナム語で
Biết kịch (別激) と呼ばれるコマンド部隊。
ベトナム戦争中に
南ベトナム軍コマンド部隊で戦った
ホア少尉への特別インタビュー。
第二回は長距離偵察任務の核心に迫ります。

Text/Kentaro Suzuki
Interview/Hiroko Ito
Photos/Hoa Pham, US ARMY, USMC,
AUSTRALIAN WAR MEMORIAL,
WPPアーカイブ

アメリカ陸軍特殊部隊の制式品であるグリーンベレーを被ったホア少尉。少尉は彼が任に就いた南ベトナム軍NKT (Nha Ky Thuat, 英名 Strategic Technical Directorate, 略称 STD) のコマンド部隊が MACV-SOG と連携して極秘任務を行っていたことから SOAA (Special Operations Association of America=アメリカ特殊作戦協会) の会員になっており、会に長く在籍していることを示す専用フラッシュが付いたグリーンベレーを贈られている。

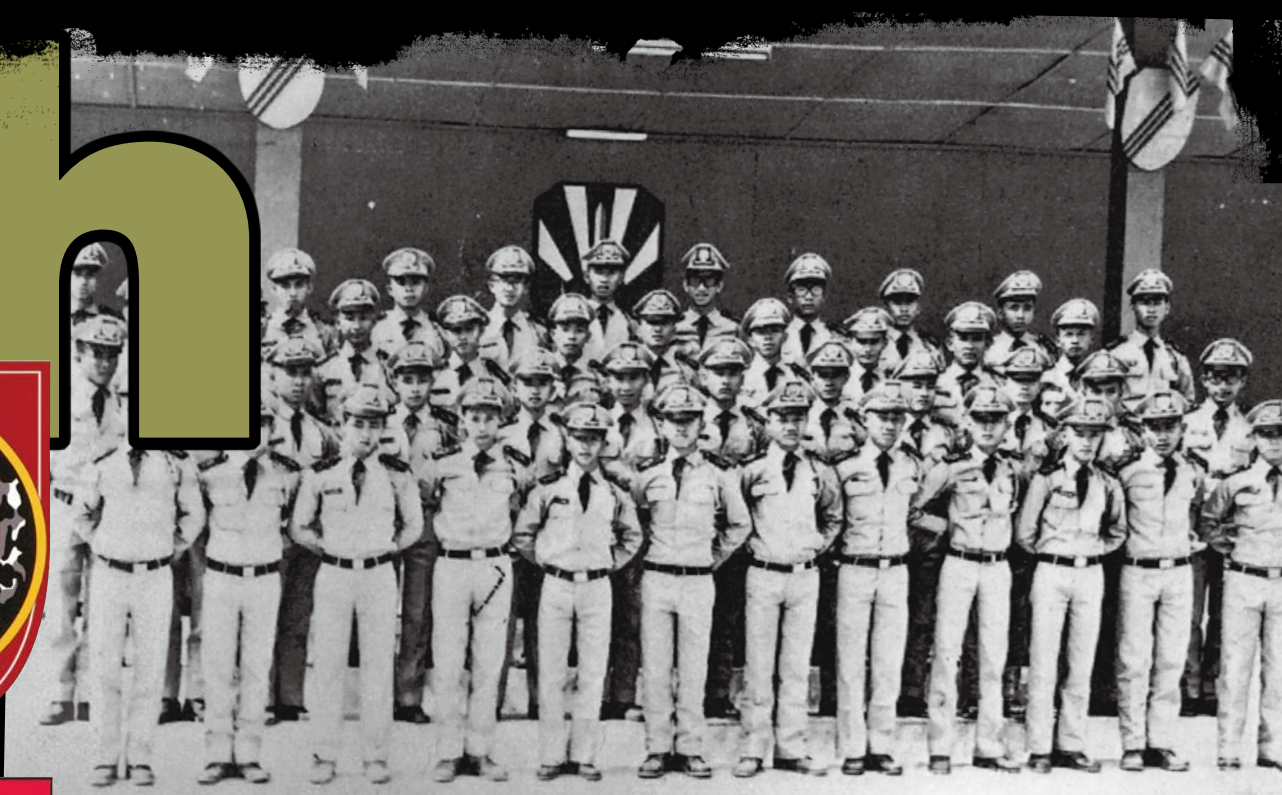


NKTコマンド部隊“雷虎 (Loi Ho)”と“黒龍 (Hac Long)”の部隊章。当時極秘であった MACV-SOG のレポートによると雷虎は Liaison Service、黒龍は Special Mission Service と記されており、定員は雷虎が 512 に対し黒龍が 990。黒龍には 45 個の UW (unconventional warfare=不正規戦) チームがあった。

ホア少尉が在籍するさまざまなアメリカ軍関連団体の ID カード。上から JFK 特殊戦博物館、UDT-SEAL 協会、特殊作戦協会、特殊部隊協会、ベトナムベテラン協会。少尉はそのほとんどで終身会員となっている。



私は 1953 年にビントウアン省ファンティエットで生まれ、15 歳になると地元で活動する武装民間防衛グループのリーダーに就任しました。グループには 150 人もの人数があり、始めて実戦を経験したのは 16 歳の時でした。1972 年にベトナム共和国軍、つまり南ベトナム軍に入隊し、その年のうちに士官教育課程を修了して NKT のコマンド部隊に志願しました。志願者は 124 人いたのですが、入隊試験に合格したのは私を含めて 3 人しかいませんでした。NKT コマンド部隊は完全に身分を隠して活動を行なう特殊作戦部隊で、アメリカ軍の MACV-SOG と協調してラオス、カンボジアへ侵入する長距離偵察など数々の極秘任務に従事していたのですが、1972 年 4 月 30 日にアメリカ軍の人員が撤退を終え、私がコマンド隊員となったのが 1972 年の 5 月だったために SOG やそのほかのアメリカ人コマンド隊員と一緒に作戦を行なうことは一度もありませんでした。私は 1975 年 4 月までの 3 年間、ダナンに拠点を置く NKT コマンド部隊“黒龍”のグループ 72、チーム 723 のチームリーダーとしてラオス国境への長距離偵察任務を何度も行ない、山には北ベトナム軍の対空ミサイル陣地、平地には何百人もの北ベトナム軍あるいは解放戦線の歩兵部隊が配置されているこの地域の偵察活動は、いかに特別な訓練を受けたコマンド隊員といえども簡単ではありませんでした。私たちが行なった長距離偵察任務で敵に遭遇する確率はおよそ 20% で、ミサイル陣地や平地の敵に発見されないように山の中腹を進むなど細心の注意を払いましたが、目の前 15 メートルほどのところに敵がいたことがありました。このような危険な任務に従事しながらも、幸運なことに私は一度負傷しただけで、現在はアメリカのカリフォルニアで暮らしながらかつての戦友たちとの交流を続けています。



(上) ホア少尉が士官教育課程を修了したドンテ下士官学校での写真。この学校は 1968 年から士官教育も行なわれており、ホア少尉のクラスには 1076 名の士官候補生がいた。(右) 南ベトナムに武器や兵員を送るために北ベトナムが造設したホーチミンルートの地図。枝分かれしながらラオスやカンボジアを経由して南ベトナムの西側へ通じている様子がよく分かる。ホア少尉がいたコマンド部隊“黒龍”のグループ 72 は一番上の矢印の東にあるダナンを拠点としていた。(下) 士官教育課程でのホア少尉とクラスの仲間たち。後列左から二番目、タバコをくわえているのがホア少尉で、アメリカ軍の撤退が進む中で撮影された写真にもかかわらず非常に和やかな雰囲気がある。



Ta van Hai, Pham Hoa, Dang De, Nguyen Van Chau
Ho Hung Dung, Nguyen Tuong Khanh
Đại Đội 765 Tiểu Đoàn 11 Đồng Đế Nha Trang - Khoa 10B72 Sĩ Quan Trú Bị 1972

ベトナム人民軍小史

—“必勝”の思いを胸に強敵を打ち破った東南アジアの赤い星—

フランス、日本、アメリカと名だたる強国と激闘を繰り広げ、国家の独立と統一を果たしたベトナム人民軍。今回はその設立からベトナム戦争終結までの足跡を辿ります。

文／鈴木健太郎 写真／PEOPLE'S ARMY OF VIETNAM, US. ARMY, NARA, WPPアーカイブ

1986年に撮影されたベトナム人民軍の警備兵。軍装はシャツをトラウザーズにたくしこむスタイルではなく、ベトナム戦争時とほとんど変化がなく、ヘルムにはここから見る限り何の装備品も付けられていないというきわめて質素な出で立ちである。トラウザーズはよく見ると膝に補強が入られており、裾にもボタンをかけて絞るためのループがあるのが分かる。被っている帽子は「ムウ・メーム（柔らかい帽子）」と呼ばれる略帽で、星と稲穂、そして歯車をモチーフとした帽章が規定通りに付けられている。

ベトナム戦争において北ベトナム軍と呼ばれたベトナム人民軍のルーツはベトナム共産党、そしてベトナム共産党を中心とするベトナム独立同盟会、通称ベトミンの創立者ホー・チミンが1944年に発足させたベトナム解放宣伝隊にあり、当時すでにホー・チミンと行動を共にしていたヴォー・グエン・ザップを最高司令官とするこの組織はフランス軍と新たに進駐した日本軍を相手にするには戦力や経験がまったく不十分だったのだが、翌1945年5月に名称をベトナム解放軍と改めると、アメリカの特務機関OSSの支援を受けながらゲリラ戦を展開するようになる。彼らは第二次大戦終

がベトナム民主共和国の領土となると事実上の北ベトナム軍となった人民軍では1955年に海軍が編成され、翌56年には空軍も加わった。人民軍はアメリカ軍がこの地での戦いに本格的に介入するきっかけとなった1964年のトンキン湾事件よりも早い時期に南ベトナムへ侵入して南ベトナム解放戦線とともにアメリカ軍や南ベトナム軍に対する激しい戦いを繰り広げ、転機となった1968年のテト攻勢で解放戦線が壊滅的な打撃を受けた後は戦いの主軸となってアメリカ軍を撤退に追い込み、1975年4月30日、南ベトナムの首都サイゴンを陥落させて10年以上続いた戦いに終止符を打った。



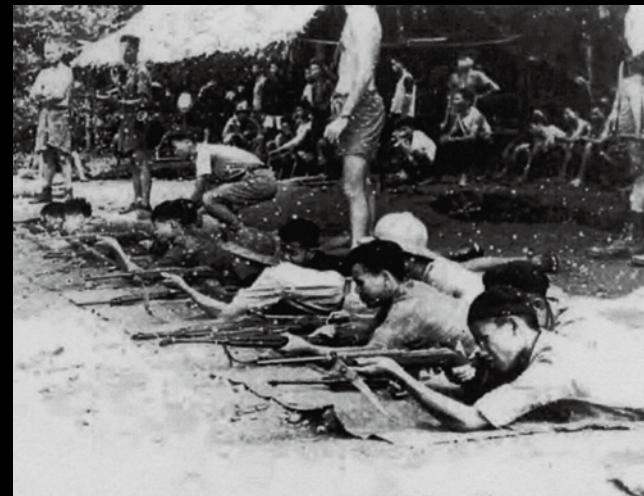
(上) 半ズボン姿のホー・チミンとスーツを着たヴォー・グエン・ザップ、防暑帽を被ったゲリラとともに写っているのは彼らを支援するために派遣されたOSS「ディアチーム」のエージェントたちである。OSSの真の目的はホー・チミンの軍隊を使ってこの地に駐留する日本軍を弱体化させることであった。(右) 軍服姿のヴォー・グエン・ザップ。政治と軍事の両面で優れた才覚を発揮した彼には「赤いナポレオン」という異名が付いた。防暑帽はベトナム人民軍のトレードマークというべきアイテムで、「ムウ・コーイ（すり鉢帽）」の呼び名がある。



ヴォー・グエン・ザップの前に整列したベトナム解放宣伝隊。銃を持った者が何人かいるが武装組織としては武器や装備がまったく足りない様子が見える。ここで写っている金星紅旗はデザインにほとんど変化のないまま現在もベトナム国旗として使用が続けられている。

結から2日後の同45年8月17日、140年あまりの歴史を持つ阮朝を倒して東南アジアで最初の社会主義国家となるベトナム民主共和国を建国する上で大きな役割を果たすのだが、「八月革命」と呼ばれるこの権力奪取により解放軍は衛國団と改名、翌46年5月には国家軍と名称を変更し、さらにこの年の12月に始まったフランスとの戦い、インドシナ戦争の最中であった1950年に名称を現在と同じ人民軍とすると1954年5月にはあまりにも有名なディエンビエンフーの戦いでフランス軍を破り9年に渡る戦争に決着を付けた。休戦協定によってベトナムが北緯17度線で南北に分断され、北部

OSSの訓練を受ける解放軍のメンバー。彼らの多くは戦闘に関してまったくの素人だったが、日本やフランスとの戦いを通じて着実に力をつけ、ベトナム戦争が本格化する頃には十分な実戦のノウハウを身につけていた。皮肉なことにOSSから供給された武器の一部はアメリカ軍に向けて用いられることになる。



UNTOLD SEAMAN BLUES

写真と語り／木村 守（元LST乗組員）
文／吉野文敏 構成／編集部

【第13回】

まだ語られていない
LST船員の記録

アメリカではニクソンが大統領に選出された1969年1月、
木村さんはまだ5回目の長い航海のまっただ中。
クリスマスに生まれて初めて七面鳥をちょっと食べ、
船内の食堂の一画に小さな鏡餅を飾り、正月を迎えていた。
相も変わらず、南のサイゴンと北のダナンの間を往復し、
あちこちの港に寄る日々が繰り返される。

ダナンの港で、LSTの着岸地に向かう途中で見かけた風景。
水面に板が渡されており、その上で裸の子どもたちが楽し
そうに遊ぶ。『海の中から何かを拾っていたんですよ。海でも川
でも子どもたちはたいいスッポンポンでしたね。』

Persian Gulf War

戦場のアーティスト Part 2

戦う男たちの肖像

[Operation Desert Shield / Operation Desert Storm]

1991年1月17日、アメリカ陸軍第101航空師団所属、第101航空連隊のヘリが、アメリカ空軍の4機の特殊作戦用MH-55ペイブローとともに、高速で低空を飛行しながら、現地バグダッド時間0236時(午前2時36分)に攻撃を開始。
「砂漠の盾作戦」は、未明のこの航空作戦とともに終了した。
それは同時に「砂漠の嵐作戦」の始まりを告げていた。

文と構成／コンバットマガジン編集部
Artwork/US Army Art Collection of CMH

Scaling the Wall With a Little Help

仲間の手を借りて、壁をよじ登る
Saudi Arabia, 1991年
Artwork/Sieger Hartgers

JAPANESE ORIGIN TAILOR TOYO WORKS

～日本発祥の洋服、スカジャン～

思わず目を惹きつけられるインパクトある刺しゅうで、
今やすっかりアメカジの定番アイテムとなったスカジャン。

洋のテイストと和装の技術が会って生まれた
唯一の日本発祥の洋服だ。それを生み出したのは
東洋エンタープライズの前身である港商商会。

その技術とモノ作りへの飽くなき情熱は現在も受け継がれ、
時代ごとに傑作を生みだしている。

2022年の新作モデルから編集部のリコメンダイテムを
ピックアップしてご紹介しよう。

写真／鶴田智昭（WPP）

文／編集部

商品問い合わせ先／東洋エンタープライズ株式会社

<https://www.toyo-enterprise.co.jp>

☎03-3632-2321（受付時間 9:30～18:00 ※土・日・祝日除く）

非常に珍しい小ぶりの書体で「YOKOSUKA JAPAN」と記された表面に対し、リバーシブル面はジャパンマップの上部に「YOKOSUKA」、下部に「JAPAN」と表記された珍しいデザイン。生地はブラックのアセテート。基となったヴィンテージは表面のみの刺しゅうだったが、テラー東洋のスペシャルエディションである「港商」のネームで再現するにあたって、スカジャンの魅力であるリバーシブル仕様に落とし込んだの復刻となった。日本地図や富士山の刺しゅうと共に海軍の軍港を象徴する龍、駆逐艦、そして鷲ではなくカモメが刺しゅうされている。

今日“スカジャン”と呼ばれるアイテムが誕生したのは終戦直後の東京といわれている。当時は「刺しゅうのジャンパー」「鷲・虎・龍のジャンパー」と呼ばれており、進駐軍の兵士たちが日本に駐留した時の記念に、スーベニア（お土産）として購入していった。それ故に“西洋人が

彼らの喜びそうなオリエンタルな刺しゅうを施した。刺しゅうにも徹底的にこだわり、当時婚礼衣装に刺しゅうを入れていた桐生や足利の職人に依頼。細かい作業の得意な日本人の技術力の高さを見つけた。

一方で生地には高価で手に入りにくかった絹ではなく、物資統制品目

ぶように売れたという。

その後、その人気に目を付けた日本各地の進駐軍基地内にある売店「PX」に、この刺しゅうのジャンパーは納められ、販売されることとなる。その人気はやがて海外の米軍基地にも広まり、1950年代中頃にはアラスカやハワイなどの米軍基地から

横須賀基地周辺で売られていたことから、刺しゅう入りのジャンパーは“スカジャン”と呼ばれ、多くの日本の若者を魅了した。そして1980年代、アメリカのヴィンテージ古着が世界中から注目されるようになり、スカジャンはその人気は不動のものになった。

復興の証、刺しゅうのジャンパー

ら見た日本を連想させる派手な絵柄”が刺しゅうのモチーフとして好まれたのだ。

戦後の混乱期、米兵相手のお店が繁盛する様子を見て、動いたのが東洋エンタープライズの前身である港商商会だ。アメリカ人に馴染みのあるベースボールジャケットを参考に、

外のアセテートを使用し、より豪華に見せるためにフロントにはジッパーを用いるなど、物資に限りがある中でアメリカ人が喜んで買っていくスーベニアを作るための試行錯誤を繰り返した。その結果誕生したのがスカジャンなのだ。完成したジャンパーは銀座の露店に持ち込まれ、飛

の依頼で、その土地土地を彷彿させるモチーフを刺しゅうしたスーベニアジャケットが作られ、輸出されていた。

1970年代、スカジャンはカルチャーに――

時は流れ1970年代――。

**TAILOR TOYO “KOSHO & CO.”
SPECIAL EDITION
YOKOSUKA DRAGON × JAPAN MAP**
価格¥101,200

テラー東洋の中でもとくに厳選した逸品を、ディティールに徹底的にこだわって再現したスペシャルエディション。戦後間もない1946年、横須賀基地に駐留していた米兵によるカスタムオーダーのスーベニアジャケットを基に復刻されたモデルだ。スカジャンの歴史の中でも最初期に作られた作品で、眼を見開いて天に昇る龍の絵柄は現在までに1着しか発見されていないという。ダークネイビーの表地はウールギャバジン。ほかのスカジャンとは一線を画す手間のかかった作りで、何重にも刺しゅうを重ね、龍の角やヒゲ、鱗などの質感が立体的に表現されている。

ネームタグはテラー東洋の前身である港商商会。ポケットの袋地にはヴィンテージに準じた千鳥格子柄のコットン生地を使用している。サイズ表記は当時と同じ「小、中、大、特大」という表記。



REVERSIBLE



第192回【現用米軍装備カタログ】 「海」装備特集 part 9

1990年代の強襲上陸装備特集 ロンドン・ブリッジ・トレーディング (以下、LBT) LBT-1195J&K編

●解説／松原 隆 ●撮影／山崎 学 ●協力ショップ／LAZY CAT、トイソルジャー、TRI'S (旧特小工房) ●協力／木島秀邦

LBT-1195J&Kとは!? 1990年代後半に生産されたLBT-1195シリーズ。カタログに記載されている正式な名称は「LBT-1195J&K VEST H-GEAR RIFLEMAN/GRENADER/M60 GUNNER RIVERINE/JUNGLE NSW」。NSWはNaval Special Warfare＝海軍特殊戦の意味で、NAVY SEALsを含む、海軍特殊部隊向けに制作された上陸用浮力ベストだ。JモデルはM4やグレネードランチャーM203を使用する目的でデザインされたモノ、KモデルはM60E4等のマシンガンを使用する目的でデザインされたモデルとなっている。以前のモデルとの違いは、軽量化を図るためにポーチ類がすべて縫い付けになり、専用モデルとなっている事だ。モジュラー・ベストはMOLLE対応のLBT-1195Nモデルが存在する。現在ではマルチカム迷彩Ver.も生産される人気のベストだ。

THE EQUIPMENTS OF THE U.S. FORCE

ミリタリア・ラウンドアップ!

U.S. ARMY

Militaria Roundup!

Part 2

シャツ&トラウザーズ

各国軍のユニフォームの基本を構成するシャツとトラウザーズ。
アメリカ陸軍シャツ&トラウザーズのPart2では、将校用のウール・シャツと関連アクセサリ、そしてシャツに着用する階級章を紹介しよう。

解説／菊月俊之 写真／青木健格 撮影協力／中田商店 ☎03-3823-8577 <https://www.nakatashoten.com/>、MASH ☎06-6567-3312 <http://www.mash-japan.co.jp>

陸軍ユニフォームとオリーブ・ドラブ

俗に“アーミー・カラー”と呼ばれ、アメリカ陸軍を象徴する色として知られるオリーブ・ドラブ（Olive-drab）。1902年にユニフォームの色として採用され、50年代にユニフォーム・カラーとしては姿を消したが、2018年に新たな制服AGU（Army Green Uniform）として復活。アメリカ陸軍とオリーブ・ドラブの結びつきは強固なものがある。だがオリーブ・ドラブには複数の色調が存在しており、ユニフォームによって色調が異なった。しかし、1926年12月30日制定の陸軍規定AR600-35では①オリーブ・ドラブ、②ライト・カラード。41年11月10日版では①オリーブ・ドラブ（ダーク・シェード）、②ドラブ（ライト・シェード）、③オリーブ・ドラブとしか記されていない。

これが1943年 8 月20日のAR600-53改定28号で、ウール・シャツの色調（色番号）がオリーブ・ドラブNo.50、No.51、No.54とカーキNo.1と規定。そして44年 3 月31日制定のAR600-35で将校用サービス・コートがNo.51（ダーク・シェード）。トラウザーズがNo.51とNo.54（ライト・シェード）。ウール・シャツが将校用ウール・ショート・オーバーコートがNo.52、将校用フィールド・オーバーコート（トレンチ・コート）がNo.2とNo.7。そしてフィールド・ジャケット（M1943）がNo.7と規定されている。ただし、今回のシリーズで紹介しているシャツとトラウザーズでは上記と異なる色番号のものが存在するなど、オリーブ・ドラブという色は思った以上に複雑だ。



2018年に布告され20年に承認されたアメリカ陸軍のアーミー・グリーン・ユニフォーム（AGU）。“アーミー・グリーン”といっても1956年導入の制服と異なり、色は第2次大戦中の将校用ユニフォーム、通称“ピンク＆グリーン”を踏襲している。写真の兵士たちはヘッドギアとしてギャリソン・キャップを着用しているが、これ以外にバイザー付きの制帽（サービス・キャップ）が存在する。（Photo:U.S. Army）



OD. No.2(OD.フィールド・ジャケット)

第2次大戦でアメリカ陸軍兵士が着用したユニフォーム3種。布地の色調はそれぞれカーキ、グリーン、ブラウンだが、陸軍の規定による色名称は全てオリーブ・ドラブ。大戦中のアメリカ陸軍のユニフォームは1926年12月31日に制定され、その後数度の改定を加えた陸軍規定AR600-35で規定されていたが、布地の色調が記載されるようになったのは43年以降だった。

OD. No.7 (M1943フィールド・ジャケット)

OD. No.54(下士官兵用サービス・コート)

塗料としてのオリーブドラブ

オリーブ・ドラブはユニフォームだけでなく、各種車輛や飛行機、装備の塗装に使用されており、車輛は1975年に4色を使用したカモフラージュ塗装に移行するまでオリーブ・ドラブの単色塗装が基本だった（4色迷彩はその後NATO規格に変更）。オリーブ・ドラブが各種装備の塗装に使用されるのは20世紀初めで、1902年のユニフォーム導入に合わせたものらしい。初期のオリーブ・ドラブは部隊が塗料を混ぜて調色しており、その色調には違いが存在した。

その後オリーブ・ドラブは軍の規格が定められ、第2次大戦前には5色が存在。各色の使用時期は異なっており、第2次大戦勃発時には緑がかった茶褐色のダーク・オリーブ・ドラブ41が基本色だった。そして大戦中には陸軍規格のほかには工兵規格、共通規格をはじめ、軍のセクション別に7種類が制定されている。ちなみに第2次大戦中に各種車輛等に使用されたのは艶消しのオリーブ・ドラブ319（陸軍仕様3-1/連邦規格34087）で、戦後の1940年代後半には艶ありで茶色の強いオリーブ・ドラブ（連邦規格24087）に変更。迷彩塗装の導入でも使用色の一つとして使用されている。

アメリカ陸軍の車輛は1970年代後半までオリーブ・ドラブの単色塗装が基本で、状況に応じて2～3色のカモフラージュ塗装を施した。大戦中のオリーブ・ドラブは連邦規格FS34087で、戦後にFS24084となったが、違いは塗料の光沢で、規格番号最初の“3”が艶消しで、“2”が半艶消しを意味する。ただし、戦後のオリーブ・ドラブは大戦中に比べて茶色が強くなっており、全く別の色に見える。写真はベトナム戦争中に撮影されたM48バットン戦車。（Photo:U.S.Army）



将校用シャツ OFFICER'S SHIRTS

前回で紹介したようにアメリカ陸軍のシャツは頭から被るスリッポン式だったが、1924年に将校用シャツは前合わせが裾まで開いたコート・スタイルに変更されている。この変更は将校限定で、陸軍規定AR600-35には「将校限定（For commissioned officer only）」と記されていた。

将校用と下士官兵用のシャツは基本的に同じデザインだが、将校用は両肩にショルダー・ループが付いているのが特徴。また袖口のボタンもツイン・ボタンだったが大戦中にシングル・ボタンに変更されている。将校用シャツはコットン製で計8種類（別表参照）が存在したが、前回紹介した毒ガス防護用の“スペシャル”版は作られていない。将校用のシャツは冬期用と夏期用に分かれ、1941年11月10日版陸軍規定SR600-35で冬期用は①ウール・フランネル、②ウール・ウーステッド、③ウール・ギャバジン、④コットン・ブロードクロス、⑤コットン・ボブリンの5種類と規定。これが戦時に簡素化され、44年 3 月31日版AR600-35では平織り又は綾織りのウールのみとなった。布地の厚さは10.5オンス（1ヤード平方の重量）で変化していない。

将校は自前でユニフォームを購入する（仕立てる）のが建前だが、陸軍補給部では任官したての将校向けの既製品（いわゆる「吊るし」）を用意しており、オーダーメイド品より安価だった。これら補給部製ユニフォームには“Reguration Office's Uniform”等のラベルが付けられた。



“ダーク・シェード”と呼ばれるオリーブ・ドラブNo.51の生地で作られたオーダーメイドの将校用シャツ。オリーブ・ドラブNo.51は将校用制服（サービス・コート）にも用いられており、“グリーン”の俗称でも呼ばれる（実際にはチョコレート色だが）。制服として着用されるもので、台襟付きで前開きは表前立て（ブレット・フロント）のデザイン。

将校用シャツ内訳

OD. ウール・シャツ（スベック98）
OD. ウーステッド・シャツ（スベック98A/98B/482）
ウール・コンバーチブル・カラー・シャツ（スベック173）
ウーステッド・コンバーチブル・カラー・シャツ（スベック173）
コットン・カーキ・シャツ（スベック98/98B/482）
コットン・コンバーチブル・カラー・シャツ（スベック173）
カーキ・トロピカル・ウーステッド・シャツ（スベック98B/482）
カーキ・ボブリン・シャツ（スベック98B/482）
ウール・オリーブ・ドラブ・シャツ
オーダーメイド品（オリーブドラブNo.51）

テラー・ラベル

ここで紹介するシャツはオハイオ州シンシナティのストールス・シャーフアー社の製品。同社は1900年代から紳士服を中心に製造販売していた老舗。

ショルダー・ループ

将校用コットン・カーキ・シャツは両肩にショルダー・ループが付いているのが下士官兵用シャツとの違い。ショルダー・ループの基部にはクロスステッチが入るが、寸法は基部から5cmと規定されている。ちなみにダーク・シェードのシャツではボタンの色も布地の色に合わせたものを用了。

襟内側

写真の将校用シャツは“スタンドアップ”と呼ばれる台襟の付いたデザインで、ネクタイを着用することが前提になっている。襟の裏側には別布が付いているが、これは襟の汚れを目立たなくするのが目的で、オーダーメイドのシャツに見られるもの。

腋内側

アームホール内側には別布が縫い付けられているが、これは脇の汗が布地の色や布地に悪影響を及ぼすのを防ぐのが目的で、高級なオーダーメイド品ならではの処理。

シャツの背面にはヨーク（肩から背にかけての切り替え部分のパーツで、両肩にフィットさせるためのもの）が付く一般的なシャツの裁断。肩と背中運動量を確保するダーツは設けられていない。



ポケット

ポケットは下部両側が丸く裁断されたラウンド型で、シャツ・ポケットの一般的なデザイン。1941年11月10日版の陸軍規定AR600-35の添付図版も同形状だが、ポケット・フラップは装飾性を重視した3ポイント型の裁断だが、前述のAR600-35添付図版ではラウンド型の裁断。また図版には2本分のベン・ポケット用ステッチが描かれているが、ここで紹介のシャツには付いていない。



袖口

袖口のカフスは2個のボタンで閉じるツインボタン式だが、面白いのは下ボロ（下手口）部分をボタンで閉じるデザインで、他の将校用シャツではあまり見かけないデザイン。





WESTERN
ARMS

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
ウエスタン アームズ 03-3407-5922
http://www.wa-gunnet.co.jp

COLT M1991A1 HEAT CUSTOM MATTE BLACK Ver.

20世紀のアクション大作をテーマにした
サブコンパクト.45カスタム



情熱的な刑事と冷静なギャングの対決を描いた傑作『ヒート（1995年製作）』。究極のリアリティと迫力いっぱいのガン・アクションを追求するマイケル・マン監督が、フランシス・フォード・コッポラの『ゴッドファーザー』でスターダムにのし上がった2大ハリウッド・スター、アル・パチーノとロバート・デ・ニーロを迎えて製作した壮大なアクション大作として、現在でも多くのファンを魅了している。2022年現在、マイケル・マンは『ヒート2』の執筆を終え、電子書籍としての配信をスタート。当然ながら、映画化の企画も進行中だという。マイケル・アクション・ファンにとっては、続編の製作・公開が待ち遠しい限りだろう。

また『ヒート』の原案になったマイケル・マンのTVスペシャル・ドラマ『メイド・イン・L.A.』も、スピ

ト・ハナが隠し持つ“オフィサーズACP M1991A1”が一際目を引く。小さくても.45ACP、見た目の大ききで勝負しない、老練なプロを象徴するような選択だった。グリップにあしらわれたアイボリーは、長年大会で悪党たちと渡り合ってきた刑事のオシャレ心を感じさせる。

1990年代まで、日本ではガバメント系コンパクト・モデルという“デトニクス・コンパクト・マスター”が良く知られていた。1980年代にモデルガンが発売された頃は、ガバメントをベースにした独特のデザインが新鮮でもあり、人気モデルのひとつ

オリジナルのメカニズムを継承しながら、フレーム、スライド、バレルを限界まで切り詰めたオフィサーズACP 1991A1。コンパクトな外観にフルサイズ・ガバメントの風格が漂う。



ーディなストーリー展開と迫力の市街戦は『ヒート』に勝るとも劣ることはない。『ヒート』の別バージョンとして、こちらも必見のアクション作品となっている。

対立する刑事とギャング、それぞれの緊迫した日常やスクリーンに登場する各種のセミオート、近代的なアサルト・ライフルやショットガンが登場する市街戦など、何度見ても飽きることのない映像が続く『ヒート』。そんな中、主人公のヴィンセン

セミコーン・タイプのバレルは、オフィサーズACP専用の真ちゅう削り出し、クロームメッキ・フィニッシュ。大型のフロント・サイトはワンポイント・タイプだ。

セミコーン・タイプのアウター・バレルに合わせた専用のバレル・ブッシングを装備。フロント・フェイスの迫力はフルサイズ・ガバメントを凌ぐ。



純正Li-Po対応FET搭載の新シリーズ＝「電動ガン+（プラス）」第一弾モデル、
「P-90+」を緊急レポート!



電動ガン+シリーズ第1弾

P-90+

Photo & Text by Takeo Ishii
株式会社 東京マルイ ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp



「純正Li-Poバッテリーの時代」を見据えた
リニューアル計画「電動ガン+（プラス）」シリーズ始動!

2022年9月30日～10月2日、東京ビッグサイトにて、じつに3年ぶりとなる「第60回 全日本模型ホビーショー」が大々的に開催され、東京マルイは以前から注目を集めていた「MARU SAFETY Li-Poバッテリー」の全貌を大型ブースで展示。さらに既存の電動ガンを順次この純正Li-poバッテリーに対応すべく改修・リニュー

アルする「電動ガン+（プラス）」シリーズ」構想を発表した。
その記念すべき第一弾モデルとして会場で初お披露目されたのが「P-90+（プラス）」である。
東西冷戦の真只中にあった1980年代、後方部隊等の備蓄装備、あるいは緊急時に使うための個人防衛火器（＝PDW）として開発されたP-90だ

が、東西冷戦終結後の'90年代半ば以降には使用弾薬である「5.7×28mm弾」の有用性や多弾数のメリット、更に軽量コンパクトさがもたらす機動性が高く評価され、特殊作戦用途に舵を切った。そして1997年4月、「在ペルー日本大使公邸占拠事件」の解決に繋がった突入攻撃作戦で使用され世界中が注目。日本での人気も沸騰した。
東京マルイが電動ガンとして発売したのは2001年で、もちろん当時の



●MARU SAFETY Li-Poバッテリー
発売時期・価格未定

「保護回路基盤」を搭載し、過充電・過放電の防止、温度センサー、短絡保護、0ボルト充電停止機能等、充実した安全機能を備える。定格電流30A MAXの「MR30コネクター」仕様で電子回路搭載の電動ガンを効率よく動作させる。専用バッテリーチェッカー、チャージャー（充電器）、インナー＆アウターの2重構造で安全性を高めたセーフティバッグ等も同時発売予定とか。

BIGヒット商品に！そして汎用性を高めた「P-90TR」やハイスイクルカスタム「PS90HC」といった各バリエーションも、その取り回しの軽快さ、使い勝手の良さで全国のサバイバルゲイマーから熱い支持を集めて来た。



月刊

THE グリーンベレー GREEN BERET

vol.48

文/DJちゅう 写真/U.S.ARMY

Special Forces Team Specialties

スペシャルフォース チームスペシャリティズ 前編

秋冬になりイベント出店集中で縫製業（3 MADE ISSUE）も全集中なDJちゅうです。オリジナルのギアブランドを製作しながら米軍特殊部隊の解説をしている特殊な僕ですが、ここ最近の個人的トピックを。ついに加入したNHKオンデマンドで当時見逃して、ずーっと気になっていた朝の連続テレビ小説『あまちゃん』をようやく視聴し、見事にどハマリ。令和で「あまロス」なんて言ってるのは僕くらいじゃないでしょうか。じゃえ！ すみません、本題です。

ここ数回を振り返るとグリーンベレーの各MOSだとかチームナンバリングシステムなど、Aチームの構造に迫る内容をご紹介してきましたね。チームに所属し、個人ごとの特殊技能が分かったと

ころで、次はチーム全体がどういった専門任務を請け負い、日々訓練を行なっているかに注目です。ODB（中隊）には12名構成のODAが6つ配置されていると前号でお伝えしましたが、その6つのチームにはそれぞれ専門分野が割り振られています。すべてのODBが共通というわけではありませんが、少なくともミリタリーフリーフォールチーム、コンバットダイバーチーム、マウンテンチーム、モビリティチームという4つの専門分野が大体のODBに配置されています。そしてほかにはダイレクトアクションチーム、または専門性を持たないラックチームがあったりと細かくは中隊規模で異なるようですね。特定のODA-XXXXはミリタリーフリーフォールを

専門にしている、というようにチームによってとくに専門性を高めるべく日々訓練を行なっているわけです。また他にも現在は解体されてしまい、HTD（Hard Target Defeat）に置き換わっていますが、中隊規模で対テロ戦に特化したCRF（Crisis Response Forces）/CIF（Commander's In-Extremis Force）も、ここ数年前まで存在していましたね。この場合は中隊規模なので6チームすべてになります。HTD/CRF/CIFに関する解説はまた近いうちにやりますので楽しみに。さて、今回は各ODBに配置されるODAが持つ標準的な専門チーム、ミリタリーフリーフォールチームとマウンテンチームの2つを解説いたしましょう。



参考文献 SOFREP [Military Free Fall Advanced Tactical Infiltration Course] [Special Forces HALO Parachuting: Go Big or Go Home], FORT CARSON MOUNTAINEER [Green Berets tackle mountainous terrain], ArmyTimes [Green Beret's free-fall death spotlights concerns, sparks working group]



機動旅団化改編間近 第5旅団 JGSDF 5th Brigade

陸上自衛隊の大改革が現在進行中だ。それも陸自創設以来最大規模ともいわれる部隊改編。新装備の配備と、編成だけでなく見た目も大きく変わろうとしている。有事ともなれば迅速に部隊を展開し、任務に当たるべく、機動化改編しているのもそのひとつ。今回は2023年3月に改編される第5旅団をクローズアップしていこう。

北海道を守る北部方面隊は、第2師団（旭川）、第7師団（東千歳）、第5旅団（帯広）、第11旅団（真駒内）と、2個師団2個旅団体制となっている。これら作戦基本部隊と呼ばれる大きなまとまりには、それぞれの役割がある。

まず、本連載でも度々クローズアップしている第7師団。こちらは機甲科（戦車）を中心としており、10式戦車と90式戦車を配備した戦車連隊

が3つもある。日本唯一の「機甲師団」として、ロシアと国境を接した北の守りの重鎮だ。

現在のウクライナ情勢を見ても、ロシアは冷戦時代と変わらず、戦車を中心とした大隊規模の戦闘グループBTGで戦っている。このBTGと戦い抜くため、機甲師団は必要不可欠だ。

こうして北海道をがっちり守る第7師団を中核に据え、その他の師団・

旅団は、北海道以外の場所であっても必要とされれば迅速に展開できるよう、機動化改編されることになった。2019年に第11旅団が、2022年に第2師団がそれぞれ改編された。続いて、今年度末である2023年3月、第5旅団も機動化改編されることが決まった。

第5旅団は、もともと今よりも規模の大きな第5師団だった。自衛隊創設前である警察予備隊時代の第5管

区總監部がその前身であり歴史も古い。1962年より第5師団として再出発。当時から道東エリアの防衛警備を担当してきた。

冷戦後、ロシアの脅威が減じたことを受け、北部方面隊を整理していくことになった。その中身は規模の縮小。これを受け、2004年3月29日、第5師団から第5旅団へと改編された。

第5師団に編成されていた第5戦車大隊は、第5戦車隊へと「大隊」か



第6普通科連隊による行進。来年度より同部隊をベースに第6即応機動連隊が作られる。その中核となるのが3個普通科中隊と16式機動戦闘車を有する機動戦闘車中隊だ。

ANOTHER SIGHT PICTURE

Turkey heliport photo session

関東を中心に活動しているミリシム集団「Experimental Diorama Graphic Element」の主催するミリタリーフォトセッションに密着。今回は茨城県「境町フィルムコミッション」と「つくば航空株式会社」の全面協力の元、現役のヘリポートを使用した撮影会が開催された。シチュエーションはトルコ インジルリク空軍基地内をイメージし、2009年頃の米DEVGRU、DELTA FORCEを中心に構成された襲撃チームに、陸軍レンジャーからの狙撃メンバー、空軍からCCTとPJのメンバーがアタッチ。本誌はその中でも空軍メンバーに焦点を当てた。

写真／PONTECIAL (twitter @pontecial instagram @pontecial_monster)
テキスト、編集／JK (instagram @ling.fuhang)
装備解説／JP (twitter@jp_edge_SBR01)
Special thanks／HARUNOBU YOKOTA & Kyosuke (instagram @rjaa_nihility)



US AIR FORCE CCT(Combat Control Team) & PJ(Pararescue Jumper)



チームのサポートとして管制や航空支援要請などを掌るコンバットコントローラー（CCT）と、隊員の医療支援を担当するパラレスキュージャンパー（PJ）と呼ばれる職種の隊員が、DEVGRU、DELTAへアタッチしていた。

地図を広げ目標地点付近の情報を共有していくCCTメンバーとPJ。目標地点の情報は細かく共有し、作戦中のチームがスムーズに動けるようにバックアップするのもCCT、PJの重要な役割である。

特別に許可を得て実現した格納庫内部からのアングル。

